文章軌範觴解序

駿河有隱君子、曰村松晩村。醫而儒。爲人謹厚和易。穆如清風、其詩體縱横變化、而不離法度。近體高潔。具有風致、其所著斯道贅言一書、文章爾雅、足見一斑、余竊謂、君胸富萬卷、故能爾、他日問諸其友、對曰、君讀書至夜分、以爲常、著書專在乎誘迪後進、如登高自卑、作文跬歩、己行于世、今又刻此書、而君之子安之、屬余作序。夫文章之道博大精微、非多讀書者不能窺。而謝氏之選、文法悉備、非善作己文者、不能解也、禪語曰。猛虎頷下金鈴、唯能繫得者。能解得。讀此書者、當作如是觀。

駿河に隱君子あり、村松晩村といふ、醫にして儒、人となり、謹厚和易、穆として清風の如し、其詩は、古體は縱横變化して法度を離れず、近體は高潔具さに風致あり、其の著す所ろ、斯道贅言の一書は、文章爾雅、一斑を見るに足る、余竊に謂ふ、君の胸は萬卷に富む、故に能く爾りと、他日これを其友に問ふ、對へて曰く、君は書を讀む、夜分に至る、以て常となす、書を著はす、專ら後進を誘迪するに在り、登高自卑、作文跬歩の如きは、已に世に行はる、今又この書を刻す、而して君の子、安之、余に屬して序を作る、夫れ文章の道は、博大精微多く書を讀む者にあらざれば、窺ふ能はず、而して謝氏の選は、文法悉く備はる、善く已れの文を作る者にあらざれば、解する能はざるなり、禪語に曰く、猛虎頷下の金鈴、唯能く繫ぎ得る者は、能く解得と、此書を讀む者は、當に是の如き觀をなすべし、明治十三年六月二日

大日本商人錄序

昔有一碩儒。告武人曰。子之學武藝善矣、亦有武運之學、子知之乎、

武人瞠眙曰、運者、適來適去之物也、故謂之運。若可學。則不可謂運、敢問、武運可得而學乎、對曰、可學也、書曰、惟命不于常、又曰、峻命不易、曰、自求多福、孟子曰、知命者、不立巖牆之下、所謂命者即運也、運之善者、謂之福、謂之吉、運之不善者、謂之禍、謂之凶、吉凶禍福、無非自取者、則是凶禍可避、而吉福可求也、夫既可求。則有學之道也必矣、有人于此、其志欲顯武勇于世、然一出陣前、而忽中砲丸、而斃、則成何功名乎、必也屢在鋒鏑交加、血肉紛挐之地、出萬死得一生、青年從軍、白首矍鑠、小而爵賞、大而公侯、是之謂武運長久矣、君既學武藝、其志豈不在此乎、武人喜曰、敢問、學武運、當由何道。碩儒曰、請近取譬、爲人臣、而事其君、欲求其恩寵、則不可不務盡其職分、以合君意、行小事、而合君意、則大事必加焉、處一事、而合君意、則萬事必任焉、如此、而君寵主恩、其有不累積者乎、今夫人之福運、其來者必自天矣、則欲求天之恩寵、不可不務盡其職分、以合其旨意、天心者仁也、天行者信也、人苟於居心處事之間、務仁愛、而不刻薄、信實而不欺詐、則天意可得而合也、居危而安。冒難而有功者、可得而期也、武人而能如此、武運斯得矣、故謂之武運之學也、昔嘗聞是言、而韙之、後數々爲人語、今及序此書、遂舉以爲商人勸焉、蓋商賈之比武人、尤不可無命運之學、而其道亦由于仁與信也、抑又聞之、英國鉅商若克孫、學問淵博、如百智韻府、徹頭徹尾、無不涉覽、嘗言、余之得福運者、由于守神誡、曰、以己之所欲、施之於人、是也、嗚呼、東西雖懸、同此地球、而主宰之神、一也、獲天恩眷之道、豈有二乎、他日我大日本商人、盡皆進于是、而我國之福運如日之升者、跂予望之、

重野成齋曰、以武運況商運、因商運、祈國運、實理實學、發乎先生心得躬踐之餘、故不厭言之煩絮、

川田甕江曰、武運稽古、愚會見之駿臺雜話。今引他話頭來。用之商賈損益論、以示勸戒、可謂妙手段矣、

昔し一の碩儒あり、武人に告げ曰く、子の武藝を學ぶは善し、亦た武運の學あり、子これを知るか、武人は愕眙して曰く、運は適來り、適去るの物なり、故に之を運といふ若し學ぶべくば、則ち運と謂ふべからず、敢て問ふ武運は得て學ぶべきか、對へて曰く、學ぶべきなり、書に曰く、惟命は常に于てせず、又曰く、峻命は易からず、曰く自ら多福を求む、孟子曰く、命を知る者は、巖牆の下に立たずと、所謂命は卽ち運なり、運の善き者は、之を福と謂ひ、之を吉と謂ふ、運の不善なる者は、之を禍と謂ひ、之を凶と謂ふ、吉凶禍福は自ら取るに非らざる者なし、則ち是れ凶禍は避くべくして、吉福は求むべきなり、夫れ既に求むべくば、則ち之を學ぶの道あるや、必ずせり、此に人あり、其志は武勇を世に顯はさんと欲す、然れども、一たび陣前に出て丶、忽ち砲丸に中りて斃るれば、則ち何の功名を成さんや、必ずや、屢々鋒鏑交々加はり、血肉紛挐の地に在り、萬死を出て丶一生を得、青年、軍に從ひ、白首矍鑠、小にして爵賞、大にして公侯、是を之れ武運長久と謂ふなり、君既に武藝を學ぶ、其志豈に此に在らざるかと、武人喜びて曰く、敢て問ふ武運を學ふは、當さに何の道に由るべき、碩儒曰く、請ふ近譬を取らん、人の臣となりて其君に事へ、其恩寵を求めんと欲すれば、則ち務めて其の職分を盡して、以て君の意に合はなるべからず、小事を行ひて、而して君の意に合へば、則ち大事必ず加はらん、一事を處して、而して君の意に合へば、則ち萬事必ず任せん、此の如くにして君寵主恩、其れ累積せざる者あらんや、今夫れ人の福運は、其の來るは、必ず天よりす、則ち天の恩寵を求めんと欲すれば、務めて其職分を盡して、以てその旨意に合はざるべからず、天心は仁なり、天行は信なり、人苟も心を居き事に

處するの間に於て、仁愛を務めて、刻薄ならず、信實にして欺詐せざれば則ち天心は得て合ふべきなり、危きに居て安く、難を冒して功ある者、得て期すべきなり、武人にして能く此の如くならば、武運は斯に得ん、故に之を武運の學と謂ふなり、昔し嘗て是言を聞きて、而して之を韙しとなし、後數々人の爲めに語る、今此の書に序するに及で、遂に擧げて以て商人の爲めに勸む、蓋し商賈の武人に比らぶる、尤も命運の學なかるべからず、而して其道亦た仁と信とに由るなり、抑々又これを聞く、英國鉅商若克孫、學問淵博、百智韻府の如きは、徹頭徹尾、渉覽せざるなし、嘗て言ふ余の福運を得るは、神誠に、己れの欲する所を以て、之を人に施こせと曰ふを守るに由ると、是れなり、嗚呼、東西は懸ると雖も、此の地球を同くして、主宰の神は一なり、天の恩眷を得るの道、豈に二つあらんや、他日我が大日本商人、盡く皆此に進みて、而して我が國の福運、日の升るが如きもの、跂て、予れ之を望む、

資行傳序

有レ子而後有レ親乎、曰、否、有レ臣而後有レ君乎、曰、否、有レ婦而後有レ夫乎、曰、否、有レ弟而後有レ兄乎、曰、否、然則父先子後、君先臣後、夫先婦後、兄先弟後、此先後之序、不レ可二得而紊一矣、（川田曰、突如起妙）古之聖人、知二其然一也、設二之教一曰、親義別序信、親者生二於慈父孝子之間一、義者生二於仁君忠臣之間一、別者生二於義夫貞婦之間一、序者生二於良兄悌弟之間一、蓋有レ物必有レ則、人各有二其地位一、則必有二義務一、故君臣父子夫婦昆弟朋友、皆無レ不レ有二義務一、各盡二其義務一、而五教始能行矣、當二聖人立レ教之始一、先以勸二誨君父一矣、未二嘗專責二臣子一也、先以戒二勅夫兄一、未二嘗偏訓二婦弟一也、試觀二于古經一、察二其意義一、言二忠行一則歸二善于君父一、言二亂賊一則歸二咎于君父一、稱二良

婦、則曰刑于寡妻、仍推重其夫、於是乎、世之君父夫兄、不能鑄其強勢、以凌寡弱、莫不務自正其躬、盡其義務、爲卑者先立之儀表。夫然。故爲之臣子爲婦爲弟者。亦必有觀感興起、與之俱化、而不自知、孔子曰、君君、臣臣、父父、子子、（又曰、一証引漢土聖人之語）嗚呼、先後之叙、自古明言之矣、自世道之降也、君父夫兄倚威重之勢、不自率先盡其義務、而所以責卑弱者獨重、曰、君雖不君、臣不可以不臣、父雖不父、子不可以不子、推而又言之、曰、夫雖不夫、妻不可以不妻、兄雖不兄、弟不可以不弟、是言也、出於臣子婦弟之口、則可也、出於君父夫兄之口、則不大悖于理乎、彌爾氏有言曰、國有黨强者、而設教者、其教偏利于强者、而不便于弱者、（又曰二証引西儒之言）夫如明王之立教、始不論强弱、何有乎黨偏、乃後世誤用之弊、或不免于如西儒之言、余竊憾焉。下野人石川和卿、奉其先人伯方君所著資用傳、請余序、受而讀之、輯錄本邦古今人善行偉績、分爲九類、其中有慈親仁君義夫良兄四類、余最韙之、以爲是必其先人之所三復致意也、蓋漢土固不乏勸人孝弟之善書、而我邦亦有孝義錄、明治孝節錄等、其所以勸奬臣子婦弟、使盡其義務者、固已備矣、至于併及其君父夫兄、勸其仁慈貞良、如此書者、則世未多有也、抑、余聞諸先師佐藤一齋翁、曰、近代賞孝子、賜金帛粟米、善矣、但宜厚賜於其親、而薄於其子、賞親之辭曰、庭訓有素、賞子之辭曰、能從庭訓、且稱人之善、當必本其父兄、如此、則不獨勸其孝弟、而幷以勸其慈友、可謂一舉而兩得矣、（又曰、三証引邦儒之語）余意者、此書使一齋翁見之、將必擊節而賞之、不特曰先獲我心而已也、而世之君父夫兄、率先盡其義務、不專責卑弱者、則彼所謂黨强設教之國、我靡得而干焉、王道蕩々、無偏無黨者、我東方君子國、他日庶其當之乎、是爲序、

川田甕江曰、愚亦嘗作是編序、不能如此扁之惻怛懇切、蓋有所溢於中、自形於外、如此、

子ありて而して後ち親ある乎、曰く否、臣ありて而して後ち君ある乎、否婦ありて而して後ち夫ある乎否、弟ありて而して後ち兄ある乎、否、然らば則ち、父は先き、子は後ち、君は先き、臣は後ち、夫は先き、婦は後ち、兄は先き、弟は後ち、此れ先後の叙、得て紊るべからず、川田曰、突如起妙古の聖人、その然るを知るや、之れが教を設けて曰く、親義別序信と、親は慈父孝子の間に生じ、義は仁君忠臣の間に生じ、別は義夫貞婦の間に生じ、序は良兄俤弟の間に生ず、蓋し物あれば、必ず則あり、人各々その地位あれば、則ち必ず義務あり、故に君臣父子夫婦昆弟朋友、皆義務あらざるなし、各々其義務を盡して、五教始めて能く行はる、聖人教を立つるの始に當り、先づ以て君父を勸誨し、未だ嘗て專ら臣子を責ざるなり、先づ以て夫兄を戒勅す

未だ嘗て偏に婦弟を訓へざるなり、試に古經を觀て、其意氣を察せよ、忠孝を言へば、則ち善を君父に歸し、亂賊を言へば、則ち咎を君父に歸し、良婦を稱すれば、則ち曰く寡妻に刑すと、仍て其夫を推重す、是に於てか、世の君父夫兄は、其强勢を藉りて、以て寡弱を凌ぐ能はず、務めて自ら其躬を正し、其義務を盡し、卑者弱者の爲めに先ち之れが儀表を立てざるなし、夫れ然り、故に之れが臣子たり、婦たり、弟たる者も、亦必ず觀感興起し之れと俱に化して自ら知らざるあり、孔子の曰く、君君臣臣父父子子と、又曰、一証漢土聖人の語を引く、嗚呼、先後の叙は、古より之を明言せり、世道の降るよりや君父夫兄は、威重の勢に倚り、自ら率先して其義務を盡さず、而して卑弱者を責むる所以は、獨り重し、曰く、君は君たらずと雖も、臣は以て臣たらざるべからず、父は父たらずと雖も、子は以て子たらざるべからず、推して而して又之を言ひて曰く、夫は夫たらずと雖も、妻は以て妻たらざる

べからず、兄は兄たらずと雖も、弟は以て弟たらざるべからずと、是言や臣子婦弟の口より出づれば、則ち可なり、君父夫兄の口より出づれば、則ち大に理に悖らずや、彌爾氏言あり、曰く、國に強き者に黨して敎を設くる者あり、其敎は偏に強き者に利にして、弱き者に便ならずと、又曰く二証西儒の敎を引く夫れ明王の敎を立つる如きは、始めより強弱を論ぜず、何ぞ黨偏にあらん、乃ち後世誤用の弊、或は西儒の言の如きを免れず、余は竊に憾む、下野の人、石川和卿、その先人伯方君著はす所の資行傳を奉じ、余に序を請ふ、受けて之を讀むに、本邦古今人の善行偉績を輯錄し、分ちて九類となす、其中に慈親、仁君、義夫、良兄の四類あり、余最も之を韙とし、以爲らく、是れ必ず其先人の三復意を致す所なり、蓋し漢土固より人に孝弟を勸むるの善書に乏しからず、而して我邦も亦た孝義錄、明治孝節錄等あり、其の臣子婦弟を勸奬し、其義務を盡さしむる所以の者、固より已に備る、併せてその君父夫兄に及び、その仁慈貞良を勸むること、此書の如き者に至りては、則ち世未だ多く有らざるなり、抑々余は諸を先師佐藤一齋翁に聞く、曰く、近代孝子を賞して、金帛粟米を賜ふは善し、但だ宜しく厚く其親に賜ひて、其子に薄くすべし親を賞するの辭に曰く、庭訓素ありと子を賞するの辭に曰く、能く庭訓に從ふと、且つ人の善を稱するには、當に必ず其父兄に本づくべし、此の如くせば則ち獨りその孝弟を勸むるのみならずして、幷せて以て其慈友を勸むるは、一舉して兩得すと謂ふべし、又曰、三証、邦儒の語を引く余意者、此書は、一齋翁をして之を見せしめば、將に必ず節を擊て、而して之を賞せんとす、特に先づ我心を獲ると曰ふのみならざるなり、而して世の君父夫兄、率先して其義務を盡し、專ら卑弱なる者を責めざれば、則ち彼の所謂強に黨して敎を設るの國、我れ得て干ることなし、王道蕩々、偏なく黨なき者、我が東方君子國、他日庶くば、其れこれ

に當らんか、是を叙となす、

支那總說序

一國之交、猶匹夫之交。惟有大小廣狹之不同耳。理則一也。有人於此、忠信篤敬、寛弘剛毅、公平仁恕、溫良謙和、則舉天下之人、莫不爲親厚之朋者、有人於此、不忠信篤敬、不寛弘剛毅、不公平仁恕、不溫良謙和、則舉天下之人、莫不爲怨懟之敵者、是知、他人之善惡。皆生於我之善惡。天下之朋敵。皆在于我之擇而取之焉耳、是故、欲求交於人、當先審己之善惡何若也、苟其己之未審、而求交於他人、譬猶盛水於瓶、而不察其滲漏、雖日夜汲井泉以滿之。吾知其徒勞而無益也已、金子東山、少而好學。嘗遊禹域、善通官話、審其制度、察其風俗人情、無不委曲周到。頃筆之於書、間付以論說、鑿々中窾、題曰支那總說、問序於余、余讀之、而有所感焉。蓋東山忠厚謙和、其有乎已者善也、故禹域之與交者、亦皆無不善、競能輸寫其誠、而吐露其實、故得成此善書也、嗚呼、東山如此以往、雖他日爲國使可也。

一國の交りは、猶ほ匹夫の交りの如し、唯だ大小廣狹の同じからざるあるのみ、理は則ち一なり此に人あり、忠信篤敬、寛弘剛毅、公平仁恕、溫良謹和ならば、則ち天下の人を舉て、親厚の朋とならざる者なし、此に人あり忠信篤敬ならず、寛弘剛毅ならず、公平仁恕ならず、溫良謹和ならざれば則ち天下の人を舉て怨懟の敵とならざる者なし、是れ知る、他人の善惡は、皆我の善惡より生じ、天下の朋敵は、皆我の擇びて之を取るに在るのみ、是の故に、交を人に求めんと欲せば、當に先づ己の善惡何若を審にすべきなり、苟も其の己れの未だ審かならずして、交を他人に求むるは、譬へば、猶ほ水を瓶に盛りて、その滲漏を察せざるがごとし、日夜に井泉を

汲み、以て之を滿たすと雖も、吾れ其徒勞にして益なきを知るのみ、金子東山は、少くして學を好み、嘗て禹域に遊び、善く官話に通じ、其制度を審にし、其風俗人情を察する、委曲周到ならざることなし、頃ろ、之を書に筆し、間付するに論說を以てし、鑿々として窾に中る、題して支那總說と曰ひ、序を余に問ふ、余は之を讀みて、感ずる所あり、蓋し東山の人となり、忠厚謙和、其の己れに有るもの善きなり、故に禹域の與に交る者も、亦皆善ならざるなく、競ひて能く其誠を輸寫して、其實を吐露す、故に此の善書を成すを得るなり、嗚呼、東山此の如き以往、他日國使たりと雖も可なり、

宗教新論序

物徂徠先生不レ喜レ佛、門人某有二至性一、以レ孝聞、其親素信二佛法一、及三某遊二物門一、强諫二其親一、不レ令レ念レ佛、徂徠聞レ之、以二國字一作レ書、陳二其不可一、大要若曰、爲レ子、而妨二其親之安心念佛一、非レ孝也、末世之儒者、謬以二聖人之道一、爲二一己之私物一、競各立二一家一、孟子與二楊墨一爭、宋儒與二佛老一爭、察二其心一、不レ過二嫉妬一、可レ鄙之甚者已、夫聖人之道者、平二治天下國家一之大道也、非レ如下佛教之特止三于治二身心一者上、比レ故不レ足二敵視一也、孔子不以下博奕上爲三猶賢乎已一乎、人不レ能二空閑而安寧一、若少有二空閑一、則罪惡入レ之矣、聖人善知二人情一、以レ此治二天下一、猶レ運二之掌上一也、蓋人至二老境一、公務離レ身、聲色無レ味、故交凋落、歡場夢冷、少年之人、不レ可二與群一、家事既讓二之其子一、則莫レ若二鉗レ口爲レ妙、蕭索無聊、日甚二一日一、故除二圍棋雙陸賽寺聽講一外、無二可レ爲之事一、於レ是、念レ佛誦レ經、豈非二絶好之閑工夫一乎、設若禁レ之、則將以二何物一換レ之、令レ慰二寂寥一乎、且夫佛法行二于吾邦一、幾二乎一千年一矣、而僧亦天下之民也、聖人之道、以レ安レ民爲レ本、疝氣積聚、既已成二痼疾一、則雖二扁鵲治レ之、必不二敢悉除去一也、蛇蝎毒蟲不レ在二于天地化育之外一、況佛法

不レ無三利二益于末世一豈出二于聖人之範圍一乎、足下唯斷二々于是非邪正之別一、故不レ覺二謬誤之至レ此也、余深服二此論一、以謂、合レ于寛二許異教一之理上、方今西教將三漸レ入二吾邦一、邦人惡レ之者、仇敵視レ之、而不レ知三其有二利益一也、信レ之者、或株二守其成說一、而不レ知三變通以適二人情一也、余甚憂焉。頃、新島君譯二此書一、論下耶蘇教有レ利二益于國一爲中文明之源上。屬二余一言一、嗟夫、使三徂徠一若生中今日上、必將レ曰、耶蘇教不レ無レ利二益于世一、而其民亦天下之民也、何嘗踰二于聖人範圍之外一哉、余又知、君之門人徐々勸二誘其親一、使二欣然領レ教則有レ之矣、强奪二其舊來之信心一、則決無レ有レ是也、夫安二民之身一者政法也、安二民之心一者教法也、古今東西、其意豈有レ二哉、刻告レ竣、遂書レ之以爲レ序。

此話出二徂徠先生答問書中一、以二國文一書レ之、余嘗讀二其書一、深服二其論一、謂、先生有二宰相之器量一、曷勝二欽仰一。（自記）

物徂徠先生は佛を喜ばず、門人某至性あり、孝を以て聞ゆ、其親は素より佛法を信ず、某の物門に遊ぶに及て、强ひてその親を諫め、佛を念せしめず、徂徠これを聞き國字を以て書を作り、其不可なるを陳ぶ、大要若曰ふ「子として其親の安心念佛を妨ぐるは孝にあらざるなり、末世の儒者は謬りて聖人の道を以て一己の私物となし、競ひて各々一家を立つ、孟子は楊墨と爭ひ、宋儒は佛老と爭ふ、其心を察するに、嫉妬に過ぎず、鄙しむべきの甚しき者のみ、夫れ聖人の道は、天下國家を平治するの大道なり佛教の特に身心を治むるに止る者の比にあらず、故に敵視するに足らざるなり、孔子は博奕を以て、猶ほ已むに賢るとなすにあらざるか、人は空閑にして、安寧なる能はず、若し少しくも空閑あらば則ち罪惡これに入る、聖人は善く人情を知る、此を以て天下を治むる、猶ほ之を掌上に運らすが如きなり、蓋し人は老境に至れば、公務は身を離れ、聲色は味なし

故交は凋落し、歡場は夢冷かに、少年の人は、與に群すべからず、家事は既に其子に讓る、則ち口を鉗するを妙となすに若くはなし、蕭索無聊、日一日より甚だし、故に圍棋雙陸賽寺聽講を除く外、爲すべきの事なし、是に於て、佛を念じ經を誦するは、豈に絶妙の閑工夫にあらざるか、設若これを禁ずれば、則ち將に何物を以て之に換へ、寂寥を慰めしめんとするか且つ夫れ佛法は吾邦に行はるゝこと、一千年に幾し、而して僧も亦天下の民なり、聖人の道は民を安んずるを以て本となす、疝氣も積聚し、既に痼疾をなせば、則ち扁鵲これを治すと雖も、必ず敢て悉く除き去らざるなり、蛇蝎毒蟲も天地化育の外に在らず、況や佛法は末世に利益なくばあらず、豈に聖人の範圍に出でんや、足下は唯だ是非邪正之別に斷々す故に謬誤の此に至るを覺らざるなり」と、余深く此論に服し以謂に異敎を寛許するの理に合ふと、方今西敎將に漸く吾邦に入らんとす、邦人の之を惡むもの、仇敵これを視て、而してその利益あるを知らざるなり、之を信ずる者は、或はその成說を株守して、變通して以て人情に適するを知らざるなり、余甚だ憂ふ、頃ろ新島君この書を譯して、耶蘇敎は國に利益あり、文明の源たるを論じ、余に一言を屬す、嗟夫、徂徠をして、今日に生きしめば、必ず將に曰はんとす、耶蘇敎は世に利益なくばあらず、而して其民も亦天下の民なり、何ぞ嘗て聖人範圍之外に踰えんやと、余又知る君の門人、徐々其親を勸誘し、欣然として敎を領せしむるは則ち是あり强てその舊來の信心を奪ふは則ち決してこれあるなきなり、夫れ民の身を安んずるものは政法なり、民の心を安んずる者は敎法なり、古今東西、其意豈に二つあらんや、刻竣るを告ぐ、遂に之を書して、以て序となす

此話は徂徠先生答問書中に出で、國文を以て之を書す、余嘗てその書を讀み、深く其論に服す、謂ふ、先生は宰相の器量ありと、曷欽仰に

勝へん（自記）

象山詩抄序

松代北澤子進、嘗蒐輯其師佐久間象山先生之詩、近又鈔爲二卷、付之梓、成、而以序屬余、蓋世之作詩者多矣、然讀其詩、而其人可知者、無幾焉、若夫讀其詩、而知其人、并以知其世者、千百而不一睹、而今于象山先生乎見之矣、當天保弘化間、文恬武熙、士風媮惰日甚、而西洋諸國之勢威、將漸及東洋諸國、以故、士之有遠識者、往々以海防爲慮、流涕大息、溢于言論、然未有能折衷東西學術、以應當世之務者也、先生自少潛心經史、及長、廣就師友、磨礪智識、又講究兵法、治火技、名蔚然起、世推爲通儒、而先生、則欿然未以自足也、三十餘歲、始攻蘭學、四十而能成一家言、嗚呼、先生非詩人也、然先生志尙之高遠、氣度之俊邁、學術之宏深、識見之超卓、以至于遊學交友君臣遇合、禍福出處、大約見于其詩、故讀之、則先生之爲人、可得而知也、且夫、先生一身、以天下自任、或則書上時相、而不見采、或則詩送秀才、而旋下獄、或則放廢山中、而混跡樵牧、或則應徵抵京、而參預廟議、其間觸緒縈懷、輒有題詠、在先生、不過發抒己意、而其事、則關係于天下國家之故焉、故讀先生詩、而其世之概略、又可以知也、重野先生曰、此段敬字先生慣用句法昔者、白蘇二公、後人以年月次第其詩、生平事蹟、具見本末、如先生、其殆庶幾乎、余三三復其詩、見嶄々然、山聳于天半也、矯々然、鳳翥于雲際也、彼世之品紅評紫、爭工拙于字句之間者、曷足與語此哉、

重野成齋先生曰、自先生非詩人一語、推衍生多少議論、結末咏歎淫泆、其音瀏然、

川田甕江先生曰、此篇以レ非二詩人一立レ論、而稱下其就レ詩可二知一其人一、并知乙其世甲、作者未レ下レ筆時、意匠慘澹經營之苦可レ想、然以レ視レ之、象山近體平凡、而五古、則有二可レ觀者一、恨篇中未二言及一レ之也、松代の北澤子進、嘗て其師佐久間象山先生の詩を蒐輯し、近ろ又鈔して二卷となし、之を梓に付して成る、而して序を以て余に屬す、蓋し世の詩を作る者多し、然もその詩を讀て、而して其人知るべき者は幾くもなし若し夫れ其詩を讀みて其人を知り、并せて以て其世を知る者は、千百にして一睹せず、而して今象山先生に于てか之を見る、天保弘化の間に當り、文恬武熙、士風媮惰日に甚し、而して西洋諸國の勢威將に漸く東洋諸國に及ばんとす、故を以て士の遠識あるもの、往々海防を以て慮となし流涕大息、言論に溢る、然も未だ能く東西の學術を折衷し、以て當世の務に應ずる者あらざるなり、先生少きより、心を經史に潛め、長ずるに及び廣く師友に就き、智識を磨礪し、又兵法を講求し、火技を治め、名蔚然として起る、世推して通儒となして、而して先生は、則ち欿然として未だ以て自ら足るとせざるなり、三十餘歲、始めて蘭學を攻め、四十にして能く一家言を成す、嗚呼、先生は詩人に非ざるなり、然ども先生志尙の高遠、氣度の俊邁學術の宏深、識見の超卓以て遊學交友、君臣遇合、禍福出處に至りては、大約ね其詩に見る、故に之を讀ば則ち先生の人となり得て知るべき也、且夫先生一身、天下を以て自ら任じ、或は則ち書時宰に上りて、采れず、或は則ち詩秀才を送りて旋て獄に下り、或は則ち山中に放廢して跡を樵牧に混じ、或は則ち徵に應じ京に抵りて、廟議に參預す、其間だ、緒に觸れ懷に縈れば、輒ち題詠あり、先生に在りては、己れの意を發抒するに過ぎず、而して其事は則ち天下國家の故に關係す、故に先生の詩を讀みて、而して其世の概略又以て知るべきなり重野先生曰く此段は敬宇先生の慣用句法、昔者、白蘇

二公、後人は年月を以てその詩を次第し、生平の事蹟は、具さに本末を見る、先生の如きは、其れ殆と庶幾乎、余その詩を三復すれば嶄々然として山天半に聳ゆるを見るなり、矯々然として、鳳雲際に騫るを見るなり、彼の世の紅を品し紫を評し、工拙を字句の間に爭ふ者、曷ぞ與に此を語るに足らんや、

漫遊記程序

余嘗謂、英人有二二種一、有二歐羅巴之英人一、有二亞細亞之英人一、我邦開港以來、英人之來住者、日月加レ多、觀二其品行一、往々有二可レ議者一、於レ是、或視以爲下狡獪詐僞不レ可二端倪一、遂謂二英人皆然一、而不レ知二此特爲二亞細亞之英人一也、夫國之富强、必有二其因一、英人之性、忠實勤勉、好二實學一、敬二眞神一、爲二官長一爲二議士一者、由レ是其選也、然、此所謂歐羅巴之英人也、我邦人獲二與レ之交一者少矣、矧於レ爲二朋友一乎、橘踰レ淮爲レ枳、樟越レ嶺爲レ榕、英之薔薇花、移二植于亞細亞一則無レ香、亞細亞之英人亦類レ此歟、中井櫻洲君、屢遊二英國一、與二其士君子一爲レ友、又與二議士某々一交最善、其悉二歐羅巴英人之情態一者、莫二君若一也、余至二倫敦一時、君既先在焉、嘗謂二諸君一曰、議士某氏爲レ君言、日本欲三英民服二其邦之律一、此必不レ可レ得之事也、然、日本若許三耶蘇教徒入二其民籍一、使レ其先服二其國法一、則英民亦將二以レ漸而從一レ之、又有二某氏一言、日本人性情易レ移、乏二堅忍不拔之氣象一、非レ除二此弊一、則未レ能二大有一爲也、又有二某氏一、作レ文極陳二英民暴行之狀一、痛斥下賣二鴉片於支那一之事上、巧譬曲喩、聽者悚然○凡如二此類一、議論公正、不レ失二於偏頗一、亞細亞英人之所レ不二多言一也、余聞而有レ所レ感焉、頃君過二余家一、出二此書一、受而讀レ之、記事實而有レ徵、錄詩華而有レ味、且余由レ是始知下君之行旅、遍二於新舊大洲一、非中獨英國上也、然則君之所レ交名士、無二國而不レ有、其所レ聞

高識卓見、其必多矣、余將屢訪其居、秋夜剪燭對榻、促膝勞君頰舌、富我腦髓、君其許之乎、遂書以弁卷端、

重野先生評曰、人種移徙、則多變、洵爲篤論、此等見解、非吾敬宇氏不能道。

余嘗て謂ふ、英人に二種あり、歐羅巴の英人あり、亞細亞の英人あり、我邦開港以來、英人の來り住する者、日月に多きを加ふ、其品行を觀るに、往々議すべき者あり、是に於て、或は觀て以て狡獪詐僞、端倪すべからずとなし、遂に英人皆然りと謂ふ、而して此れ特に亞細亞の英人たるを知らざるなり、夫れ國の富强は必ず其因あり、英人の性は、忠實勉强實學を好み眞神を敬ひ、官長となり、議士となる者、是に由て其れ選まるゝなり、然ども、此れ所謂歐羅巴の英人なり、我が邦人之れと交るを獲るもの少し、矧んや、朋友となるに於ておや、橘は淮を踰ゆれば枳となり、樟は嶺を越ゆれば榕となる、英の薔薇花、亞細亞に移し植れば則ち香なし、亞細亞の英人も亦た此に類するか、中井櫻洲君、屢英國に遊び、其士君子と友たり、又議士某々と交り最も善し、その歐羅巴英人の情態を知る者、君に若くし莫きなり、余倫敦に至る時、君既に先づ在り、嘗て之を君に聞く、曰く、日本にて、英民その邦の律に服するを欲す、此れ必ず得るべからざるの事なり然も、日本若し耶蘇教徒、その民籍に入るを許し、其をして先づ其國法に服せしめば、則ち英民も亦將に漸を以て之に從はんとす、又某氏ありて言ふ、日本人の性情移り易く、堅忍不拔の氣象に乏し、此弊を除くにあらざれば、則ち未だ大に爲す事ある能はざるなりと、又某氏あり、文を作りて、極めて英民暴行の狀を陳べ、痛く鴉片を支那に賣るの事を斥げ、巧に譬へ曲さに喩す、聽く者悚然たり、凡そ此の類の如く、議論公正にして偏頗に失せざるは、亞細亞英人の多く言はざる所なりと、余聞きて而して

感ずる所あり、頃ろ、君余の家に過ぎ、此書を出す、受けて之を讀めば、記事は實にして徵あり、錄詩は華にして味あり、且つ余は是に由て始めて君の行旅は新舊大洲に遍く、獨り英國のみに非ざるを知るなり、然らば則ち、君の交る所の名士は、國にして有らざるなく、その聞く所の高識卓見それ必ず多からん、余は將に屢々其居を訪ひ、秋夜燭を剪り榻を對し、膝を促し、君の頰舌を勞して、我の腦髓を富さんとす、君それ之を許すか、遂に書して以て卷端に弁す、

日本名家史論序

余嘗謂、論二古今人物一、不レ得レ不下以二道理一爲二權衡一、以二時勢一爲中度量上、而此之道理、有レ時乎不レ可レ通二於彼一、至二于時勢一、則古今懸絕、邦國各異、且書之所レ記、不レ過二大略一、或涉二謬傳一、況、人之心意、不レ能下無二偏頗一無中愛憎上、故其論二人物一得二平允一、決非二易事一、雖二名家一、亦以爲レ難也、蘇東坡議論冠二絕千古一、然論二范增一、以二其去當レ於下羽之殺二卿子冠軍一時上、論二荀卿一、以二傲愎不遜、自許太過一、至レ曰下李斯以二學術一亂秦、荀卿敎レ之也○論二留侯一、以爲、能忍傳レ自二黃石公一、而敎二之於高帝一、其文章波瀾老成、無二以尙レ之、然未レ知下其所レ論、果能服二三子之心一乎否上、淸田君嘿、示レ余以二其所レ編日本名家史論一、且問曰、誠如二子說一、則如二玆書一者、亦可二以己一乎、余曰、何其然、蓋論之平允者、讀レ之而有レ益、固也、乃其不二平允一者、縱雖レ不レ關二古人之痛痒一、而絕大道理、絕高識見、或由レ是以顯焉、如二東坡范增論一、起二增於九原一、而質レ之、則必笑而不レ受矣、然其言三人之去就、宜二知レ機而速決一、則可レ長二人識見一、其論二子房一、始無レ當二于子房一、然其言四能忍不レ忍二者、可三以決二大事之成敗一、絕大道理、剔發無二餘蘊一、豈不下大有レ益二于後人一乎、其論二荀卿一、極欠二平允一、寃亦甚矣、然陳二高談異論之害一、則正大之言、痛快之辨、不二啻若二秦

華峙、而江河流一也、由レ是觀レ之、凡諸名家史論、毋レ問二其平允與レ否讀レ之無レ不レ有レ益、神而明レ之、存二乎其人一、刻告レ竣、遂書以爲レ序、

余嘗て謂ふ、古今の人物を論ずるには、道理を以て權衡となし、時勢を以て度量となさゞるを得ずと、而して此の道理は時ありてか彼れに通ずべからず、時勢に至りては、則ち古今懸絶、邦國各〻異り、且つ書の記す所は大略に過ず、或は謬傳に涉る、況や人の心意は偏頗なく愛憎なき能はず、故に其の人物を論じて平允を得るは、決して易事にあらず、名家と雖も亦た以て難しとなすなり、蘇東坡の議論は千古に冠絶す、然も范增を論ずれば、其の去るは當さに羽の卿子冠軍を殺す時に於てすべきを以てす、荀卿を論ずれば、傲愎不遜、自ら許す太過ぐるを以てす、李斯學術を以て秦を亂るは、荀卿これを教ふるなりと曰ふに至る、留侯を論じて以爲らく、能く忍ぶは黃石公より傳はり、而して之を高帝に教ふと、其文章は波瀾老成、以て之に尙るなし、然ども未だその論ずる所、果して能く三子の心を服するか否を知らず、東坡すら且つ然り、況や其他をや、清田君嘿、余に示すに、其の編する所の日本名家史論を以てし、且つ問ひて曰く誠に子の說の如くば、則ちこの書の如き者、亦た以て已むべきか、余曰く何ぞ其れ然らん、蓋し論の平允なる者は、之を讀みて而して益あるは、固よりなり、乃ちその平允ならざる者は、縱ひ古人の痛痒に關せずと雖も而かも絕大の道理、絕高の識見、或は是に由りて顯る、東坡の范增論の如き、增を九原より起して、而して之を質さば、則ち必ず笑ひて而して受けざらん、然もその人の去就は、宜しく機を知りて、而して速に決すべし、と言ふは、則ち人の識見を長ずべし、その子房を論ずるは、始めより子房に當るなし、然もその能く忍ぶ忍ばざるの二つの者は、以て大事の成敗を決すべしと言ふは、絕大の道理、剔發して餘蘊なきは、豈に大に後人に益

するあらずや、その荷卿を論ずる、極めて平允を欠き、寃も亦甚し、然ども高談異論の害を陳るは、則ち正大の言、痛快の辨、啻だ泰華峙ちて、而して江河流るゝのみならざるなり、是に由て之を觀れば、凡そ諸名家史論は其平允と否とを問ふことなく、之を讀みて益あらざるなし、神にして之を明にするは、其人に存す、刻竣るを告ぐ、遂に書して以て序となす、

餘身歸序

苦樂者人世之常也、以レ苦爲レ苦、以レ樂爲レ樂者、常人而迷寡者也、至二於迷之深者一、不二獨以レ苦爲レ苦、而又以レ樂爲レ苦矣、若夫悟道之人、則觀二苦樂一爲レ一、猶二晝夜之相終始者一、故居二苦境一、而不レ爲二苦所二囚繫一、在二樂境一、而不レ爲二樂所二迷溺一、其胸中灑々落々、如二光風霽月一、其心志澄清泰定、如二明鏡止水一、雖レ在二刀鋸鼎鑊之中一、瘴烟毒霧之地一、而精神悠々、往二來於八極一、莫二之能夭閼者一、雖レ在二富貴功名之場一、順便快意之時一、其心而不二爲加二毫髮一、不レ驕不レ淫、常能以レ樂還レ樂、不レ使二其轉而爲レ苦、嗚乎、若人豈易レ得哉、以二予所レ見、如二伊達自得翁一者、庶幾乎、翁昔以レ事被二禁錮一者十年、後又被レ囚三年、其境可レ謂レ苦矣、其居レ苦、亦可レ謂レ久矣、然而翁視以爲二公署一、端居整然、未二嘗有二箕踞一、時常手二一部藏經一、晨夜誦讀、心々相證、以レ此自娛、翁本瘦弱多レ病、然在レ囚十年間、罹二微恙一、僅七日、及二其出一レ獄也、身體堅强、肉色肥好、自レ非レ在二苦境一而能樂者上、惡能如レ此乎、後翁著二一書一、錄二其在レ囚時事一、題曰二餘身歸一、蓋蘇生之意也、翁嘗謂レ余、佛書云、人樂二苦之始一、嗟乎、苦樂相因、被二其眩轉一者常人也、常人居二苦境一、安能得レ樂乎、在二死地一、安能得レ蘇乎、如レ翁者、心地光明、超二脫乎苦樂之表一、而其所レ歸、未二嘗不レ樂、其得二蘇生一也宜矣、翁乞レ予題二一言一、因書レ此還レ之、

苦樂は人世の常なり、苦を以て苦となし、樂を以て樂となすは、常人にし

て、迷ひ寡き者なり、迷の深き者に至りては、獨り苦を以て苦となすのみならず、而して又且つ樂を以て苦となす、夫の悟道の人の如きは、則ち苦樂を覩て一となす、猶ほ晝夜の相終始する者のごとし、故に苦境に居て而して苦の囚繫する所とならず、樂地に在りて、而して樂の迷溺する所とならず、其胸中灑々落々、光風霽月の如く、其心志は澄清泰定、明鏡止水の如く、刀鋸鼎鑊の中、瘴烟毒霧の地に在りと雖も、而も精神悠々として八極に往來し、之を能く天閼する者なし、富貴功名の場、順便快意の時に在りと雖も、而も、其心は爲めに毫髮を加へず、驕らず淫せず、常に能く樂を以て樂に還り、其れをして轉して苦とならしめざるなり、嗚呼、若のごとき人、豈に得やすからんや、予の見る所を以てせば、伊達自得翁の如き者、庶幾からんか、翁昔し事を以て禁錮せらるゝ者十年、後ち又囚はるゝこと三年、其境は苦と謂ふべし、その苦に居る、亦た久しと謂ふべし、然ども而かも翁は視て以て公署となし、端居整然、未だ嘗て箕踞するあらず、時、常に一部の藏經を手にして、晨夜誦讀し、心心相證し、此を以て自らたのしむ、翁は本と瘦弱にして病多し、然ども囚に在ること十年の間、微恙に罹ること僅に七日、その獄を出づるに及でや、身體堅强、肉色肥好なり苦境に在て、而して能く樂む者にあらざるよりは、惡んぞ能く此の如くならんや、後ち翁は一書を著して、その囚に在る時の事を著はし、題して餘身歸と曰ふ、蓋し蘇生の意なり、翁嘗て余に謂ふ、佛書に云ふ、人は苦の始を樂むと、嗟乎、苦樂相因る、其の眩轉せらるゝ者は常人なり、常人は苦境に居る、安んぞ能く樂しむを得んや、死地に在り、安ぞ能く蘇するを得んや、翁の如き者は、心地光明、苦樂の表に超脫して、其の歸する所、未だ嘗て樂しまずんばあらず、其の蘇生を得るや、宜なり、翁は予に乞ひて一言を題す、因て此を書して之を還す、

吾乘四載集跋

友人竹添君、近歸自禹域、胠其槖、則幽冀徐豫梁益荆吳之山川險易、風俗醇醨、描寫歷々、若目覩之、搜討古跡、徘徊墟墓之間、笑罵堅子、憑吊英雄、感慨悲歌、若耳聽之、使余不覺廢卷而長歎也、嗚呼、大才則大用、小才則小用、君才雖大矣、若不乘四載、不遊九州、則其才亦囿於小耳、何得有此莽々蒼々、雄奇鉅大之篇乎哉、因思、英雄豪傑之出于世、亦猶此、苟不得其時而乘其勢、則與豎子竟歸于一轍、使其徒發阮籍廣武之歎焉耳、聞君復將航于吳、翼日再倒其囊而示之、則不知使余又爲何等感慨也、姑書數語於卷末、以見余之於君、傾注情殷、期待正復不小也、

大槻愛古先生曰、竹添進一君、余嘗見之仙臺戊辰戰爭中者、爾來、不知消息何如、忽讀此文、方知遊海外萬里之國、獲雄偉悲壯之作、而歸、可謂壯矣、安得再會堂、歷叙爾時艱難非常之事耶、爲之悵然、

友人竹添君近ろ禹域より歸り、其槖を胠けば、則ち幽冀徐豫梁益荆吳の山川險易、風俗醇醨、描寫歷々、目これを覩るが若し、古跡を搜討し、墟墓の間を徘徊し、堅子を笑罵し、英雄を憑吊し、感慨悲歌、耳これを聽くが若く余をして覺えず卷を廢して長歎せしむるなり、嗚呼、大才は則ち大用し小才は則ち小用す、君の才は大なりと雖も、若し四載に乘らず、九州に遊ばざらしめば、則ち其才も亦た小に囿るのみ、何ぞ此の莽々蒼々、雄奇鉅大の篇あるを得んや、因て思ふに英雄豪傑の世に出るも、亦猶ほ此のごとし、苟も其時を得て而して其勢に乘せざれば、則ち堅子と竟に一轍に歸し、其れをして徒に阮籍廣武の歎を發せしむるのみ、聞く、君復た將に

吳に航せんとすと、異日再びその囊を倒にして、而して之を示さば、則ち余をして又何等の感慨をなさしむるを知らざるなり、姑く數語を卷末に書し、以て余の君に於る傾注情殷、期待正に復た小ならざるを見すなり、

棧雲峽雨日記序

我東方亞細亞洲、文藝最盛、人物多出、莫二禹域若一也、疆域廣、生齒繁、莫二禹域若一也、可下與二歐羅巴一頡頏上者、莫二禹域若一也、禹域與二我邦一、文字同、可二親厚一一也、人種同、可二親厚一二也、輔車相依、唇齒之國、可二親厚一三也、亞細亞不二及レ今同レ心合レ力、則一旦有レ事、權歸二于白皙種一、而我黃種危矣、可二親厚一四也、抑々元世祖之侵二我西疆一、我邦人之擾二閩浙一、當二是時一、不レ有二歐羅巴之外交一也、不レ有二狼子野心之覬覦者一也、設使レ如二今日一、則二國必無二此事一矣、今也、我邦與二禹域一、務當下大小相忘、强弱莫レ角、誠心實意、交如二兄弟一、互相親信、不レ容二讒間一、有レ過相寬恕、無禮不中相咎上、蓋二國所レ期者、在下于同レ心協レ力、保二護獨立一、以存中亞細亞之權上而已矣、近者、我通二航禹域一、發二遣公使一、莫レ非二職是之由一也、竹添光鴻君、奉レ命往二禹域一、行二旅古燕趙周鄭秦蜀吳楚之地一、暫歸二故土一、余幸得レ讀二其所レ作棧雲峽雨記一、地勢民俗、縷載不レ遺、洵爲下方今有用之書、可レ備二參考一者上也、至下其描二繪山川一、文字之工上、讀者自知レ之矣、余不二敢贅一、

我が東方亞細亞洲の文藝最も盛に、人物多く出づるは、禹域に若くなきなり、疆域は廣く、生齒は繁きこと、禹域に若くなきなり、禹域は我邦と文字同じ、親厚すべき、一なり、人種同じ、親厚すべき、二なり、輔車相ひ依り、唇齒の國、親厚すべき、三なり、亞細亞今に及で、心を同くし、力を合せざれば則ち一旦事あれば、權は白皙種に歸して、而して我が黃種は危し、親厚す

べき、四なり、抑々元の世祖の我が西疆を侵し、我邦人の閩浙を擾る、是時に當り、未だ歐羅巴の外交あらざるなり、狼子野心の覬覦する者あらざる也、設今日の如くならば、則ち二國必ず此の事なし、今や我邦と禹域と務めて當に大小相忘れ、强弱角ふなく、誠心實意、交り兄弟の如く、互に相ひ親信して、讒間を容れず、過あらば、相ひ寛恕し、無禮相ひ咎めざるべし蓋し二國の期する所の者は、同心協力、獨立を保護して、以て亞細亞の權を存するに在るのみ、近頃、我邦禹域に通航し、公使を發遣するは、職ら是れにこれ由らざるなきなり、竹添光鴻君、命を奉じて禹域に往き、古の燕趙周鄭秦蜀吳楚の地を行旅し、暫く故土に歸る、余幸にその作る所の棧雲峽雨記を讀むを得たり、地勢民俗、縷載して遺さず、洵に方今有用の書參考に備ふべき者たるなり、その山川を描繪する文字の工みなるに至りては、讀む者自ら之を知る、余は敢て贅せず、

利用論序

中子曰、物無不有用、而用與不用、利與不利、則存乎人、（成齋曰、此其骨子、）人者其用物之主乎、金銀通寶者、民用之最便利者也、然倘使無知之少年用之、則或迷溺酒色、或賭博蕩產、驕傲之人主用之、則出師征遠、草菅人命、禍蔓宗社、宋眞宗命三使司陳恕、具中外錢穀大數、以聞、恕終不進、眞宗命執政詰之、恕曰、上富於春秋、若知府庫之充溢、恐生侈心、善乎、日耳曼理學者之言曰、人之凶禍、未有甚于愚而多財者也、故知均是財也、智用之、則利、愚用之、則不利、故曰、利用存于人、中子曰、物之利用、有因人之地位而變者、貪汚之吏、利重秋、而良民則苦之、文明之民利自由、而暴君則惡之、南人之阻逆風者、北人之乘順風也、輸者之失利者、贏者之得利也、又有因時勢而變者、大陽

沒レ西、而燈火有レ光、金風撼レ樹、而團扇無レ寵、砲鎗用、而弓矢不レ利、電線用、而樹膠生レ價、猶下之人智進、而民權始爲二一理一、眞神之道彰、而萬神之說廢上、蓋事物之利用、因二地位時勢一而變移、有二如レ此者一、中子曰、有二小利一、有二大利一、有二私利一、有二公利一、有二一國之利一、有二天下之利一、租稅也、刑法也、通二小大公私之利一者也、戰鬪也、和好也、通二一國天下之利一者也、利用者所以使二人生達二於福祉安樂一之物也、成齋曰、此一節詞句簡淨、以包括前後、此其關鍵處、中子曰、無二物而不レ有レ用者一、造物主之大經濟也、動物所レ吐之氣、植物吸レ之、植物所レ出之氣、動物資レ之、彼之無用者、此之利用也、交換養育、如二環無一レ端、臭腐神奇、相化而不レ窮、蓋物無レ不レ有レ用、人特不レ知、以爲二無用一耳、小兒若二無レ用者一、然未レ有下不レ爲二小兒一、而遽爲二大人一者上、則謂二小兒一爲二無用一乎、當二其無一、有二有之用一、謂二室之空虛一爲二無用一乎、禍災損害、人每遇レ之、必益二其識量一、艱難苦痛、人每受レ之、必長二其道德一、死者、人之所二甚惡一也、然、人之進修日新、孳々不レ怠者、以慮二一旦溘露一也、死亦何嘗爲二無用之物一乎、視レ天夢々、若二無レ用者一、而赫々明々、昭鑒不レ忒、人有レ所二勸懲一、以二身後一爲二幽渺無レ知、乃察二靈魂永存之理一、而若レ有下賞罰可二憑賴一者上、嗚呼、宇宙間一切無用之物、一經二妙用點化一、無レ不レ歸二于有用一、利用之說、至哉大矣、頃、澁谷子發、譯二彌氏利用論一、成、請二余詹言一、余乃書レ所レ見、以與レ之、不レ知、彌氏果首二肯於九原之下一乎、否、

重野成齋曰、化二無用一爲二有用一者在レ人、而溯二其源一、則天下事物無二不レ有レ用者一、論旨原二於老莊一、而文字亦帶二古色一、

川田甕江曰、妙語格言、衝レ口而出、處々以二中子曰一提起、不二別設一結構一、如レ讀二莊子一、如レ讀二淮南子一、何等老手、

又曰、篇中格言、若押レ韻、則更妙、

中子曰く、物は用あらざるなし、而して用と不用と、利と不利とは、則ち人

に存す、人は其れ物を用ふるの主なる乎、金銀通寶は、民用の最も便利なるものなり、然れども、倘し無知の少年をして之を用ひしめば、則ち或は酒色に、迷溺し、或は賭博して產を蕩す、驕傲の人主これを用ひれば、則ち師を出し遠を征し、人命を草菅にし、禍は宗社に蔓る、宋の眞宗は三使司陳恕に命じて、中外の錢穀大數を具して以聞せしむ、恕は終に進めず、眞宗執政に命じて之を詰る、恕曰く、上は春秋に富む、若し府庫の充溢するを知らば、恐らくは侈る心を生ぜんと、善かな、日耳曼理學者の言に曰く人の凶禍は未だ愚にして財多きより甚しきものあらざるなりと、故に知る、均しく是れ財なり、智これを用ふれば、則ち利、愚これを用ふれば則ち不利、故に曰く、利用は人に存すと、中子曰く、物の利用は、人の地位に因て變ずる者あり、貪汚の吏は重稅を利として、而して良民は則ち之を苦む、文明の民は自由を利として、暴君は則ち之を惡む、南人の逆風に阻するは、北人の順風に乘ずるなり、輸る者の利を失ふは、贏者の利を得るなり、又時勢に因て變ずるものあり、大陽は西に沒して燈火光りあり、金風樹を撼して團扇は寵なし、砲鎗用られて、而して弓矢利あらず、電線用ひられて、而して樹膠は價を生ず、猶ほ之れ人智進みて民權始めて一理となり、眞神の道彰はれて、而して萬神の說廢るがごとし、蓋し事物の利用は地位時勢に因て變移する、此の如きものあり、中子曰く、小利あり、大利あり、私利あり公利あり、一國の利あり、天下の利あり、租稅なり、刑法なり小大公私の利を通ずる者なり、戰鬪なり、和好なり、一國天下の利を通ずる者なり利用は人生をして福祉安樂に達せしむる所以の物なり、中子曰く、物として用あらざる者なし、造物主の大經濟なり、動物吐く所の氣は、植物これを吸ひ、植物出す所の氣は、動物これを資る、彼れの無用は此の利用也、交換養育、環の端なきが如く、臭腐神奇、相化して窮らず、蓋し物

は用あらざるなし、人特知らずして、以て無用となすのみ、小兒は用なきものゝ如し、然ども未だ小兒たらずして、遽に大人となる者あらず、則ち小兒を謂ひて無用となさん乎、その無に當りて有の用あり、室の空虛を謂ひて無用となさん乎、禍災損害は、人これに遇ふ毎に、必ず其識量を益す、艱難苦痛は、人これを受る毎に、必ずその道德を長ず、死は人の甚だ惡む所なり、然ども人の進修日新、孳々として、怠らざる者は、一旦の溘露を慮るを以てなり、死も亦何ぞ嘗て無用の物となさん乎、天を視るに夢々たり、用なき者の若し、而も赫々明々、昭鑒赤はず、人は勸懲する所あり、身後を以て幽渺にして知ることなしとすれども、乃ち靈魂永く存ずるの理を察して、而して賞罰の憑賴すべき者あるがごとし、嗚呼、宇宙間一切無用の物、一たび妙用點化を經れば、有用に歸せざることなし、利用の說至れるかな、大なり、頃ろ、澁谷子發、彌氏の利用論を譯して成る、余に詹言を請ふ、余乃ち見る所を書して以て之に與ふ、知らず、彌氏果して九原の下に首肯するか、否や、

送關鐵卿遊唐國序

下谷不之善書善詩者而關君鐵卿、其最錚々者也、余意者、鐵卿茲行、乘三菱郵船可達于上海、而上海屬江蘇、善詩筆者、苟遊於江蘇安徽浙江三省、謂畧盡唐國之鉅觀可也、按、江蘇安徽、始合爲江南一省、東濱瀛海、西接楚湘、北連齊豫、而大江貫其中、明時作陪京、冠蓋萃焉、聲名文物、貨物賦稅、甲天下、浙江負海倚山、南走閩關、北通震澤、杭州、南宋所都、而紹興乃古越都、學士君子之多、浙省稱雄於天下焉、鐵卿今遊江浙、其士大夫賢士、必多喜與之遊、文酒談讌、其樂必有不可勝言者、抑、江蘇者、梅福、梁鴻、蔡邕、蘇東坡之所流寓、而

沈周、祝允明、唐寅、文徵明、董其昌、陳繼儒之所生也、安徽者、黄山谷、蘇子由、米元章之所遊宦、而李陽氷、朱文公之所生也、浙江者、顔魯公、杜牧之、范文正、蘇文忠之所遊宦、謝安、王羲之之所流寓、而趙子昂、劉誠意、宋景濂、王陽明、徐文長之所生也世代雖邈矣、而古人之流風餘韻、其豈不無尚可見者乎、長碑短碣、殘毫剩素、豈不無尚存焉者乎、若夫論山川之可登覽者、江蘇、則鐘山、石頭、姑蘇、靈巖、鷄籠、牛首、丹陽、莫愁、太湖、笠澤、金山、黄浦、惠山、句曲、而陸羽泉之水可試、而吳宮之跡、要離之冢可訪也、安徽、則黄山谷、齊雲、牛渚、采石、巢湖、烏江、瑯琊、而潁州之西湖、則歐陽公、蘇東坡之所觴咏也、浙省、則釣臺在焉、紹興之西子村、曹娥碑、梅市、蘭亭、其遺蹟、庶可尋矣、杭州府城西之西湖、則白蘇二公之所築長堤也、所謂六橋桃花、南渡君相嬉遊于此、而使金主亮聞而羨焉、卒起投鞭渡江之志者、鐵卿游此、其欲不感慨賦詩得乎、台州有天台、雁岩、括蒼、天姥、而劉阮洞、在天台縣西北、又名桃源洞、余囑鐵卿、若遊焉、其勿入山而採藥也、仙女設得遇君、豈能許令放歸乎哉、

鐵卿不果此遊、而忽遊於無何有之鄉、豈果入桃源、而不歸乎、噫、（自記）

下谷には書を善くし詩を善くする者に乏しからず、而して關君鐵卿は其の最も錚々たるものなり、余意者、鐵卿の此行、三菱郵船に乘り、上海に達すべし、而して上海は江蘇に屬す、詩筆を善くする者苟も江蘇、安徽浙江三省に遊べば、署唐國の鉅觀を盡すと謂ふも可なり、按するに、江蘇安徽は、始め合して江南一省たり、東は瀛海に濱し、西は楚湘に接し、北は齊豫に連り、而して大江は其中を貫く、明の時に陪京となり冠蓋萃る、聲名文物、貨財賦税は天下に甲たり、浙江は海を負ひ、山に倚り、南は閩關に走

り、北は震澤に通ず、杭州は南宋の都する所ろ、而して紹興は乃ち古の越都、學士君子の多き、浙省は雄を天下に稱す焉、鐵卿今江浙に遊ばゞ、其士大夫賢士、必ず多く喜びて之と遊び、文酒談讌、其樂必ず勝けて言ふべからざるものあらん、抑々江蘇は梅福、梁鴻、蔡邕、蘇東坡の流寓する所にして、沈周祝允明、唐寅、文徵明、董其昌、陳繼儒の生るゝ所なり、安徽は黃山谷蘇子由、米元章の宦遊する所にして、李陽氷、朱文公の生るゝ所なり、浙江は顏魯公、杜牧之、范文正、蘇文忠の遊宦する所、謝安、王義之の流寓する所にして、趙子昂、劉誠意、宋景濂、王陽明、徐文長の生るゝ所なり、世代邈かなりと雖も、而も古人の流風餘韻、それ豈に尙ほ見るへき無からざらんや長碑短碣、殘毫剩素、其れ豈に尙ほ存ずる者なからざらんや、若し夫れ山川の登覽すべき者を論ずれば、江蘇には鍾山、石頭、姑蘇、靈巖、鷄籠、牛首、丹陽、莫愁、太湖、笠澤、金山、黃浦、惠山、句曲、而して陸羽泉の水試みるべく、而して吳宮の跡、要離の冢、訪ふべきなり、安徽は、則ち黃山、齊雲、牛渚、采石、巢湖烏江、瑯琊、而潁州之西湖は、則ち歐陽公、蘇東坡の觴咏する所なり、浙省には則ち釣臺在焉紹興の西子村、曹蛾碑、梅市、蘭亭、其遺蹟庶可尋矣、杭州府城西の西湖は、則ち白蘇二公の長堤を築く所なり、所謂六橋の桃花、南渡の君相、此に嬉游し、而して金主亮をして聞て羨み、卒に鞭を投して江を渡るの志を起さしむる者、鐵卿こゝに遊ぶ、其の感慨して詩を賦せざらんと欲するも得んや、台州には天台、雁岩、括蒼、天姥あり、而して劉阮洞は天台縣の西北に在り、又桃源洞と名づく、余は鐵卿に囑す、若し遊ばゞ、其れ山に入りて藥を採る勿れ、仙女設君に遇ふを得ば、豈に能く許して放ち歸らしめんや、

詢蕘齋文抄序

文武一道也、昔在征韓之役、今藤堂詢堯公始祖高山公、以武勇顯、炳烺史冊、兒童走卒無不知者、正直十六歲、始入昌平學、與海內諸俊髦交、藉々稱道、津藩文學之盛、冠於上國、詢堯公胸襟恢廓、氣象雄偉、好賢下士、才俊如林、而如津阪東陽、齋藤拙堂、土井晩牙、其最傑出者也、心甚慕之、既而聞涑水通鑑鋟于津藩、急購而讀之、卷首有公序、雄快絕倫、竊謂、當時諸侯能文、未有若公者也、始祖雄於武、公雄於文、氣脉相接、輝映古今、有如此哉、其後時事騷擾、如風雲之倏忽變化、廿餘年、展轉徙居、未能與公一相見也、及至近歲、捷息稍定、而公治邸于江東、文酒談讌、追尋舊盟、起風月無盡之樓、招集文士、新故畢至、而正直亦幸得參末席、嗚呼、自少慕之、至今始得相見、豈不足慰平生之想乎、於是、益得公文而讀之、知其論恢廓、其筆雄偉、與其人相稱也、夫在兵馬倥偬之際、成功名、取封侯、固不爲易、在太平無事之日、振起政教、恢張文運、尤爲難也、公生長于豐亨豫大之時、世方耽驕奢、事逸樂、而獨以聽政之暇、潛心問學、其所作之文、雖專門名家、無以過之、風化所被、人材蔚起、一時津藩、號稱多士、昔者、李漢序昌黎文曰、其摧陷廓清之功、比於武事、可謂雄偉不常者矣、如公之於文、何曾讓於始祖武功哉、余聞、高山公性又好文學、居常與藤林諸儒、論經講道、蓋有開必先、淵源果有所自、益知文武一道也、詢堯齋文抄刻成、公屬余序、於是乎言、

重野成齋曰、收今昔情事於尺幅中、不侈言、不倨色、渾厚澹雅似桐城一派、

王弢園曰、此文簡老樸潔、雖瓣香廬陵、而不蹈其弊、知於此道三折肱矣、

文武は一道なり、昔在征韓の役に、今の藤堂詢堯公の始祖高山公は武勇

以て顯はれ、史冊に炳焉たり、兒童走卒も知らざるものなし、正直は十六歳に、始めて昌平學に入り、海内の諸俊髦と交るに、藉々として稱道し、津藩文學の盛なる、上國に冠す、詢堯公は胸襟恢廓、氣象雄偉、賢を好み、士に下る、才俊は林の如く、而して津阪東陽、齋藤拙堂、土井聱牙の如きは、其の最も傑出する者なり、心甚だ之を慕ふ、既にして而して、涑水通鑑の津藩に鋟するを聞き、急に購ひて之を讀めば、卷首に公の序あり、雄快絶倫なり、竊に謂ふ、當時諸侯の文を能するは、未だ公の如き者あらざるなり、始祖は武に雄なり公は文に雄なり、氣脉相接して、古今に輝映する、此の如きある哉と、其後ち時事騷擾する、風雲の倏忽變化するが如きこと、二十餘年、展轉徙居して、未だ公と一たび相見る能はざるなり、近歳に至るに及て、棲息稍や定り、而して公は邸を江東に治め、文酒談讌して、奮盟を追尋す、風月無盡の樓を起して、文士を招集す、新故畢く至りて、正直も亦幸に

末席に參するを得たり、嗚呼、少きより之を慕ひ、今に至りて始めて相見るを得たり、豈に平生の想を慰むるに足らざるか、是に於て、益々公の文を得て、而して之を讀み、其論は恢廓、其筆は雄偉、其人と相稱ふを知るなり、夫れ兵馬倥偬の際に在りて、功名を成し、封侯を取るは、固より易しとなさず、太平無事の日に在りて、政教を振起し文運を恢張するは、尤も難しとなすなり、公は豐亨豫大の時に生長し、世力に驕奢に耽り、逸樂を事として、而して獨り政を聽くの暇を以て、心を問學に潛め、その作る所の文は、專門名家と雖も、以て之に過るなし、風化の被る所、人材蔚起し、一時は、津藩號して多士と稱す、昔者、李漢は昌黎の文に序して曰く、其摧陷廓清の功は、武事に比すれば、雄偉常ならざる者と謂ふべしと、公の文に於る如きは、何ぞ曾て始祖の武功に讓らんや、余聞く、高山公、性又文學を好み、居常に藤林諸儒と經を論じ、道を講ずと、蓋し開くあれば必ず先ず、淵

源果して自る所あり、益々文武の一道なるを知るなり、詢莞齋文鈔刻成る、公は余に叙を屬す、是に於てか言ふ、

亞細亞言語集序

今世人之汲々於學唐話者、以其便於交際也、余則以謂、學唐話固爲方今之要務、而尤不可不知交際之道也、交際之道、何如、曰、忠恕而已矣、夫忠恕之心、充于中、而信實之言、發于外、不事張皇禮儀、而自然恭敬、不事煩數來往、而自然親愛、不用謀計、而共享福利、不容讒間、而並敦友誼、既能如此、而又學習言語、以期乎情無所不通、意無所不盡、此之謂知本、若乃舍其本、而末是務、則言語雖巧、何足濟事、不幾于不能三年之喪、而緦小功之察、放飯流歠、而問無齒決乎、廣部君學南北唐話、有年于此、所著亞細亞言語集、採諸書之要、加之增訂、精密無訛、尤便於初學、余欲此編之大行于世、故首以交際之道爲之說、蓋人必先有大本領、而後語言之爲用、有不可勝道者矣、

以忠恕二字爲骨、以本字爲筋、日清交際益開、不可無言語集、學言語集、不可不允會此骨與筋、此篇謂忠恕在交際之前、而言語末也、是孟子所謂恭敬者、幣之末將者意、（吾妻升拜評）

今世人の唐話を學ぶに汲々する者は、その交際に便ずるを以てなり、余は則ち以謂、唐話を學ぶは固に方今の要務となし、而して尤も交際の道を知らざるべからざるなり、交際の道は何如ん、曰く、忠恕のみ、夫れ忠恕の心、中に充ちて、而して信實の言は外に發す、張皇禮儀を事とせずして自然に恭敬し、煩數來往を事とせずして、自然に親愛し、謀計を用ひずして、共に福利を享け、讒間を容れずして、並に友誼を敦くす、既に能く此く

如くして、而して又言語を學習し、以て情は通せざる所なく、意は盡さざる所なきを期す、此を之れ本を知ると謂ふ、若し乃ち其本を舍て、而して末を是れ務むれば、則ち言語は巧みなりと雖も、何ぞ事を濟すに足らん三年の喪を能せずして緦小功を之れ察し、放飯流歠して齒決すること無きを問ふに幾からずや、廣部君は南北唐話を學ぶ、此に年あり、著す所の亞細亞言語集は、諸書の要を採り、之に增訂を加へ、精密にして訛なく尤も初學に便ず、余は此篇の大に世に行はるゝを欲す、故に首に交際の道を以て之が說をなす、蓋し人は必ず先づ大本領ありて、而して後ち、語言の用たる、勝て道ふべからざる者あり、

錦窠翁耄筵記序

丈夫爲レ志、窮當二益〻堅一、老當二益〻壯一、是伏波將軍馬援之言也、馬援征二交趾一時、年六十二、衝二冒毒氣一、克二平南方一、此不二啻口能言レ之一、而又能躬踐レ之矣、余常誦二此言一、以爲、士之志レ學者、亦當下以二神勇一奮往直前觸二冒艱難一、蔑視老死上焉耳、雖レ然、余少二於馬援出征時一十餘歲、不レ知後來果能レ是乎否、不レ爲二徒言一乎否、去年之冬、伊藤錦窠翁過レ予。閑談移レ晷、翁慨然曰、吾父以二九十二齡一終、明年吾八十矣、吾嘗發二議於學士會院一、欲下遣二人於漢韓一、研究本草學上、設子有レ意乘レ桴乎、吾其呵二叱風浪一矣、嗚呼、是其神勇、奚減二馬將軍一哉、翁嗜二本草學一、夙顯二名于海外一、年愈老、嗜愈篤、於以見下其學術之廣深、與二翁之壽一均、不レ可二得而測一也、今茲壬午四月十六日、其門人謀下陳二列動植礦物等一、爲レ翁侑壽觴上、編二其目錄一、請下余題中一言上、蓋翁之老而益〻壯、余心儀レ之久矣、詩所謂君子是則是傚者、非レ翁而誰、余何得レ不二欣然執レ筆乎、

西人有レ言、人生當レ如二勇將一、此篇直是三勇之戰、一讀不二振起一者、

其人非丈夫、吾妻生嘗評、
敬宇先生曰、是日、余病頭風、不能侍盛筵、爲恨深矣、然翁前程、
尚有八十八、及期願之賀筵在焉、余亦得屢捧壽觴、爲幸不更
大矣乎、

丈夫志をなす、窮しては當に益々堅かるべく、老いては當に益々壯なるべしとは是れ伏波將軍馬援の言なり、馬援の交趾を征する時、年六十二毒氣を衝冒し南方を克平す、此れ啻だ口能く之を言ふのみならず、而して又能く躬これを踐む、余常に此言を誦して以爲らく、士の學に志すもの、亦當に神勇を以て奮往直前し、艱難に觸冒し、老死を蔑視すべきのみと、然りと雖も余は馬援出征の時より少きこと十餘歲、知らず後來果して是を能くするか否、徒言たらざるか否、去年の冬、伊藤錦窠翁は予に過ぎ、閑談して暑を移す、翁は慨然として曰く、吾父は九十二齡を以て終る明年吾れ八十なり、吾嘗て議を學士會院に發し、人を漢韓に遣はし、本草學を研究せんと欲す、設(もし)孚(いかだ)に乘るに意あるか、吾れ其れ風浪を呵叱せんと、是れ其の神勇、奚ぞ馬將軍に減ぜんや、翁は本草學を嗜み、夙に名を海外に顯す、年愈々老いて嗜み愈々篤し、こゝに以て其學術の廣深と、翁の壽と均しく得て測るべからざるを見るなり、今茲(ことし)壬午四月十六日、其門人は動植礦物等を陳列し、翁の爲に壽觴を侑(すゝ)めんことを謀り、余に一言を題せんことを請ふ、蓋し翁の老て益々壯なる、余が心これを儀すること久し、詩の所謂る君子是れ則り、是れ傚ふ者、翁に非らずして誰ぞ、余何ぞ欣然として筆を執らざるを得んや、

旬六遊篇豆州紀游詩序

日者、漆園王君之寓二敝廬一也、余與レ君昕夕談論、或連日不二相見一、則必

有二一篇出而驚レ人者一、居一歳、而余見二其所レ作、不レ踰二數篇一、竊謂閉レ門覔レ句陳無己、君豈其人耶、與レ之別、倏忽數年、君出二其句六游篇豆州紀游詩一、見レ示、且徵二一言一、受而讀レ之、或抒二寫景物一、或憑二吊古跡一、或酬二答諸人一、興酣淋漓、筆翰如レ飛、而音調高雅、不二啻若一構思而後得レ之也、於レ是乎又驚、對レ客揮レ毫秦少游、君殆其人矣、君到二成田一、喜二其梵宇崇深、山林幽密一、謂、恍如二杭之天竺、寧之天童一、余讀レ之、心魂飛動、不レ知他日能得下到二杭寧一、寓二王君之樓一、遊中目其山川上耶、但恨三余非二無己少游其人一耳、

羚羊挂レ角、無二迹可レ求、吾妻生僭評、

日者、漆園王君の敝廬に寓するや、余は君と昕夕に談論し、或は連日相ひ見ざれば、則ち必ず一篇の出でゝ、而して人を驚す者あり、居ること一歳而して余その作る所を見る數篇を踰えず竊に謂ふ、門を閉ぢ句を覔む陳無己君は豈に其人ならんか、之と別るゝ倏忽數年、君はその句六游篇豆州紀游詩を出して、余に示し、且つ一言を徵す、受けて之を讀むに、或は景物を抒寫し、或は古跡を憑吊し、或は諸人に酬答し、興酣淋漓、筆翰飛ぶが如くにして、音調高雅、啻だ構思して而して後に之を得る如きのみならざるなり、是に於てか又驚く客に對し毫を揮ふ秦少游君は殆と其人なり、君は成田に到り、其梵宇の崇深、山林の幽密を喜び、謂ふ恍として杭の天竺寧の天童の如し、余これを讀みて心魂飛動す、知らず、他日能く杭寧に到り、王君の樓に寓して其山川に游目するを得るか、但余は無己少游その人に非らざるを恨むのみ、

學生及青年之修養良材 作文軌範 終

學生及青年之修養良材 作文軌範
定價金六拾五錢

大正六年六月廿六日印刷
大正六年六月廿九日發行

著作者 吾妻兵治
發行者 東京市日本橋區本銀町一丁目十二番地 村山庄三郎
印刷者 東京市京橋區新榮町五丁目七番地 村田豐吉
印刷所 東京市京橋區新榮町五丁目七番地 大倉印刷所
發行所 東京市日本橋區本銀町一丁目十二番地 振替口座東京二二五〇八番 文正堂書店

不許複製

26

363
201

終